



たてやま おらがんまつち



館山市北条地区南町 南街の山車

地域の紹介

南町は、北条地区市役所通りと国道128号線が交わる「南町交差点」から長須賀方面へのびる道の両側に広がる地域です。この道は、江戸時代には「房総往還」と言われた街道で、江戸への陸路の街道でした。

この街道沿いには大店や寺社が軒を連ね、その裏には江戸神輿も手がけた安房師の草分の松屋をはじめ、文化三年(一八六三)の鶴谷八幡宮造営にあたって世話役を務め、北条組大工を束ねた羽山林兵衛や、あまりの切れ味に悪用されたため徳川幕府が製造を禁止するほどだったと伝えられる「房州鋸」の職人や塗師、大工などたくさんの職人たちが住んでいました。

それらのことがいまでも南町が「職人の街」と言われる所以です。近年では住宅地が増え、五百戸にもなる大きな地域になりました。町の中心的存在の蛭子神社では氏子達により毎月の神社掃除をはじめ、さまざまな催事が行われています。

自慢の山車

南町の自慢と言えば、なんといってもやわたんまち(安房国司祭)に出祭する「山車」です。この山車は明治二十九年に製作されました。その形は「江戸型山車」といわれる人形せりだし型の山車で、日本の初代天皇とされる「神武天皇」の人形を乗せています。山車正面扁額にある「南街」という金箔で染められた文字の「街」の字が、その昔の賑わいを伝えるように鮮やかに輝いています。

そして、所狭しとばかりにつけられた数々の彫刻は、房州後藤流初代橘義光の手によるもの。躍動感にあふれる龍、兎、鶴、亀をはじめ、「浦島」を題材とした生きいきとした表情の場面などが重厚に彫られています。その彫りの深さや厚さ、きめ細やかさは初代義光ならではの圧倒的な存在感のすばらしいものばかりです。

さらに町内の職人などにより数多くつけられた彫金類や房州地方では類をみない朱と黒の総漆塗で染められた車体など、赤を主にした美しい山車に仕上がっています。囃子座の四本の支柱は「几帳面彫」という細部ま



房州後藤流 初代橘義光の彫刻

で丁寧に仕上げられたものです。そして優美な形の電線除け、燃戻のついた提灯短冊など細かな部分にも気が配られています。また、近年ではあまりみられなくなった「梃子棒」を今でも積んでおり、鶴谷八幡宮入祭の時などに使用しています。

「職人の街」南町の人々の山車への熱い想いと誇りが感じられます。



隅々まで気配られている山車装飾



- 制作年：明治二十九年
- 人形：神武天皇
- 扁額：南街
- 上幕：龍
- 大幕：獅子に牡丹
- 泥幕：波に千鳥
- 提灯：赤に白抜き巴紋が三つ
- 半天：煉瓦崩し
- 彫刻：唐子、西王母、八岐大蛇、浦島龍、兎、鶴、亀など
- 彫刻師：後藤利兵衛、橘義光(房州後藤流初代)

近藤 画